

チンチン電車の日

中村 龍介

日本で初めて路面電車が開通したのは、一八九五年二月一日、京都市内の小路東洞院く伏見京橋の京都電気鉄道であった。それを記念して、実際の月日とは関係ないが、六（ロ）、十（デン）の語呂合わせから、六月十日が「路面電車の日」と制定された。

一方、東京では、約八年遅れて、一九〇三年八月二二日、東京電車鉄道の路面電車が、新橋―品川間で営業運転を開始した。記念日が、京都にあって首都にないのはおかしいという理由からだろうか、八月二二日が「チンチン電車の日」となった。

「チンチン電車」という呼称は、乗客への警報として運転手が足で床の鐘ベルを鳴らす音から来ており、これは、運転手と車掌間の合図にも用いられ、鐘は次のような意味を持っていた。

- 走行中電車が停留所に近づいたとき「チン」と一回鳴らせば「降客があるため停車せよ」または「停車する」
- 「チンチン」と二回鳴らせば「降客がないので通過しても良いか」または「良い」
- さらに、停車中に「チンチン」と二回鳴らした場合は「乗降がすんだので発車しても良いか」または「良い」
- 「チンチンチンチン」と三回以上の連打は非常の合図で「直ちに停車せよ」または「停車する」

運転手と車掌がベルで連絡を取り合うというのは、如何にもものんびりした話だが、「チンチン」と走る路面電車は昭和の中頃までの風物詩でもあった。

昭和、平成から令和の御代になった今日、大都会の街中を走る公共の交通機関では、車掌という存在が希少になってしまった。路線バスはもちろん、地下鉄でもワンマン運転の車輛が圧倒的に多い。それどころか、モノレール等の新しい都市交通の中には、新交通システムと呼ばれる、運転手も不要の自動運転を採用したのも珍しくない。

新交通システムでは軌道の上を走るのだから、無人運転もある程度は想像できる。が、一般道路を走る自動車さえ、人工頭脳（AI）を搭載すれば



自動で目的地まで走行してくれるといった、夢のような話が現実になりつつある。

戦中派の頭脳では、AIの仕組みや原理などを理解できるはずもないが、生きているうちに、一度は、自分の車にAIを搭載して、私はゆつたりと助手席に腰を沈め、移り行く窓の外の景色を楽しみたい。

もし、そんなことが実現すれば、あの世で待っている筈の、ドライブ好きだった妻への格好の土産話になるだろう。

【二〇一九年八月二十二日（チンチン電車の日）に合わせて、

原稿用紙三・五枚 課題「音」】